

Title	書評：岡原正幸編著『アート・ライフ・社会学： エンパワーするアートベース・リサーチ』晃洋書房、2020年7月
Sub Title	
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2021
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.26 (2021. 7) ,p.87- 93
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20210703-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

岡原正幸編著『アート・ライフ・社会学—エンパワーするアートベースト・リサーチ』

晃洋書房、2020年7月
有末 賢

楽しい本である。エンパワーするかどうかは、読者の側にも「立場の違い」や「状況の違い」があるので、何とも言えないが、楽しく考えさせてくれることは確かである。岡原正幸さんは、1989年、塾文学部の助手に就任して以来、私にとって「気になる社会学者」であった。『生の技法』¹⁾で「鮮烈なデビュー」を飾って以来、『ホモ・アフェクトス』²⁾でも『感情の社会学』³⁾でも「いささかの反感」と共に「大いなる共感」を持って、読んできた。私は、都市社会学、地域社会学、生活史研究といった、「枠を嵌め(られ)た社会学者」である。法学部政治学科出身だからと言うよりも、社研出身でも同年代に近い、吉澤夏子さん、永田えり子さん、鈴木智之さん、草柳千早さん、澤井敦さんなど三田社会学の面々は、皆「優等生」である。岡原さんは、頭は良いが、「優等生」ではない。これは、はっきりしている。いつでも、「抵抗する社会学者」であり続けている。岡原さんの、スマートでカッコよい、ホテル生き方、生きもがいていた姿、暗中模索をしていた姿、常に権力、権威に向かって抵抗する生き方などが、60代に入って、このような形に落ち着いてきたのかと感慨深いものがある。岡原正幸とアートについては、最後にまた振り返ることにしよう。

本書は、Ⅲ部構成、全11章で、コラムの執筆者も含めると総勢19名という壮観な本である。荒井裕樹「第1章 女性が笑う、「女性」を嘲笑う—ウーマン・リブのミュージカル「女の解放」—」は、社会運動の「表現」を読むというウーマン・リブの歴史社会学である。大変興味深い「リブ合宿」や田中美津『いのちの女たちへ』、リブ新宿センターやドテカボ一座『女の解放』など、初期のフェミニズム運動の表現がたどられている。これらが、当事者たちの回想ではなく、アート表現として研究者の俎上に載っている点に興味を惹かれる。山下香「第2章 個人の趣味が生み出すエンパワーメント—高齢の婦人が制作する手芸作品「おかんアート」の事例から—」は、楽しそうな「おかんアート」をとりあげている。「おかんアート」のきっかけとなったのは、1995年1月17日の阪神淡路大震災で甚大な被害を受けた神戸市兵庫区・長田区などを出た婦人たちの手芸教室であった。このことも、災害社会学や地域社会学、コミュニティ研究の事例紹介ならば、真っ先に阪神淡路大震災とその後の地域の復興の記述がくるが、山下さんは、おかんたちの手芸活動とエンパワーメントが主題である。震災があってもなくても、個人の趣味は継続できる。アートの強みは、ここにあるのかもしれない。つまり、社会が先にあるのではなく、個人の意志が先にあるという認識である。このことは、小坂有資「第3章 ハンセン病者をめぐる社会関係の変容—ART SETOUCHIにおける国立療養所大島青松園での活動に着目して—」にも言える。小坂さんは、記述の順番は、ハンセン病問題や国立療養所大島青松園のことを先に説明しているが、主題化されているのは、ART SETOUCHIの媒介者・媒介物・媒介装置によって、入所者をめぐるコミュニケーションや社会関係が微妙に変容してきた、と言う事実である。つまり、アートによる社会関係の変容という大きなテーマが隠されている。小坂さんは、学生たちに「こえび隊」に参加させ、ガイドツアーも担当させている。アクションリサーチを取り入れながらのアートの実践なのである。

有末賢「岡原正幸編著『アート・ライフ・社会学—エンパワーするアートベースト・リサーチ』
『三田社会学』第26号(2021年7月)87-94頁

石野由香里「第 4 章 たった一人の自分の人生だけを生きなくてもいい—他者をなぞるように演じる—」は、もっとアート（ここでは演劇）の実践を志している。石野さんは、文化人類学を勉強し、俳優でもあり、明星大学で学生たちに、「ある高齢化団地に実在する人物の、実際にあった出来事をそのまま演じてもらう」と言う実践を行っている。自分以外の誰かを演じることで、自分では体験できない体験をすることができる。これは、若い時によく言う「自分を超越する」という体験を身近に感じてもらうとともに、「自分を超越することの難しさ」も味わってもらうという二重の意味が込められていると思われる。第 4 章の最後に、コラムを書いている今泉靖徳さんは、石野さんの「あくど」の協力者で、高齢者の相談援助の仕事をして 7 年間行った経験から、長いコラムが書かれている。これは、コミュニティにおいて高齢者の「生き死に」を扱う社会的実践の現場の声だが、それ自体が、本書では「演劇的な構成」を演出している。編著や教科書で今まで「コラム」という形式は何度も使われてきたが、この石野さんの本文と今泉さんの「コラム」は、まさに演劇的手法である。一人の目で見ることと他者からの視点、他者をなぞることで現れるもう一人の生き方などが本章を読むことで、舞台が立ち上がってくるという仕組みになっている。

第 II 部は、映像や音楽も使って、アートの世界を広げていく試みである。SONIA HEDSTRAND & HIROKO TSUCHIMOTO (槌本紘子)「第 5 章 “CONTEMPORARY ART & EMOTIONAL MANAGEMENT” —コラボレーションするアートワークショップの事例—」は、2017 年秋に、慶應義塾大学を含む 4 か所で行った「現代アートと感情マネジメント」というパフォーマンスワークショップの記録である。口絵 6 では、プルサコワありなさんによる慶應 SKC 計画、「H/F」活動レポートが掲載されているが、本文では、現代アーティストであるソニアさんと槌本さんが、コラボレーションの難しさについて「コンセンサス方式」やストックホルム近代美術館 Moderna Museet で行ったワークショップの実際が書かれている。本書の口絵 5～7 を見ると、ストックホルム以外でも慶應義塾大学三田キャンパス、ドイツ遠征公演ミュンスター市、カッセル市が入っている。このようなグローバルなアートのパフォーマンスが岡原さんたちの特徴でもある。ここでは、あまり強調されていないが、これだけグローバルな活動では、日本語だけでなく、英語、ドイツ語なども駆使してコミュニケーションが図られているわけである。言語生活でのエンパワーメントと言語を超えた視覚的、聴覚的なエンパワーメントについても論じられると良かったと思った。

土屋大輔「第 6 章 調査を ABR にする—『レプリカ交響曲《広島平和記念公園 8 月 6 日》(2015)』制作事例—」は、『レプリカ交響曲』というインスタレーションを制作する過程が、ABR (Arts-Based Research) にあたるという主張である。ABR とは、SBR (Science-Based Research) に対抗する、岡原さんたちの対抗概念であり、方法概念である。つまり、これまでの社会科学、人文科学が科学 (Sciences) に基づいて行ってきた調査の方法を、アート (芸術) に基づいた調査によって基礎づけ、展開していきたいという宣言でもある。ABR についての議論は、第 11 章で再度取り上げるとして、土屋さんの『レプリカ交響曲』とは、2015 年の広島平和記念公園 8 月 6 日を同時に複数個所でビデオ録画し、取材場所を空間的に再現したビデオ・インスタレーションのことである。松尾浩一郎・根本雅也・小倉康嗣編『原爆をまなざす人びと—広島平和記念公演八月六日のビジュアル・エスノグラフィー』⁴⁾が全体の共同研究として刊行されているが、土屋さんの『レプリカ交響曲』は、17 本の統制された映像が「ミニチュア」内の空間的位置づけと、6 日午前 2 時に始まる時間軸に沿って演奏されていく。これらが制作されていく調査プロセスが ABR と名付けられる。まず、ショット

リストの再考、ショットマップの作成が行われ、「レプリカ」の図面を作成し、「楽譜」を考案し、「楽譜」が作成された。「楽譜」の作成作業には、音楽用の楽譜（10段）が用いられている。「濃度」概念も重要である。8時15分に向けて「濃度」は増大し、その後正午に向けては減少、夕刻に向けて再び増大していく、というダイナミズムを描くことのできるビデオインスタレーションが表現されている。土屋さんが、最初から音楽をイメージして『レプリカ交響曲』を作成したのか、17本のビデオ録画を構成していく過程で、音楽が作られていったのか、それはわからないが、ABR（Arts-Based Research）であることは間違いない。そして、アート作品としての『レプリカ交響曲』は、鑑賞者に8月6日の平和記念公園を体験させ、レプリケーションさせていく。土屋さんの第6章は、『アート・ライフ・社会学』のエッセンスが詰まった章と言える。第9章の小倉康嗣さんの「高校生が描く原爆の絵」とちょうど対をなしている。時間と空間、音楽と言う時間芸術とキャンパスという空間芸術である美術とが、「ヒロシマ原爆」という一点で背中合わせをなしている。調査過程もそれぞれの個性が出ている。

後藤一樹・坪井聡志「第7章 私の人生を歌える？—ライフストーリーのビジュアル化とサウンド化—」は、千葉県市原市の牛久商店街の『牛久のれん』と言うライフストーリーのビジュアル・ナラティブ作品がABRとなっている。菓子屋や旅館の女将（おかみ）のライフストーリーが歌詞となり、「きおくうた」となって、上演され、演奏されるわけである。第7章には、歌詞だけでなく、楽譜も記録されており、おかみさんや店主の写真も豊富に掲載されている（口絵3～4も参照）。これらは、単に、地元商店街の活性化、祭りの一部の行事（イベント）で終わってしまうならば、資料が残されることもない。「私の人生を歌えるのか？」というABRならではの問いとなって初めて、社会学の研究書に掲載される価値が生じるのである。ポルトガルの民謡で「ファド(Fado)」⁵⁾という独特の節回しの歌があるが、人生歌謡から出発して、今や立派な「民俗歌謡」となっている。韓国の「パンソリ」もそうだし、日本の「演歌」「艶歌」もそうだろう。黒人たちのゴスペルもジャズも人生を歌うところからしか生まれてこない。その意味で、アートの原点なのかもしれない。

第Ⅲ部は、本書のまとめになっているのであろう。荻野亮一「第8章 生きることをつくる、つくることを生きる—演劇ワークショップの社会学—」は、「演劇ワークショップ」の取り組みを分析し、参加者へのエンパワーメントについて考察している。確か岡原さんも塾経済学部を卒業した後、ドイツに留学したのは、演劇を学ぶためだった。日本のカルチュラル・スタディーズの推進役の一人、吉見俊哉先生（東京大学教授）も、学生時代に如月小春の劇団に所属していたことがある。イギリスの「応用演劇」やドイツの「実験演劇」なども影響しているものと思われる。荻野さんの「演劇ワークショップを考える」で面白いのは、【1】セラピーではない、【2】メソッドではない、と「Non」を發した上で、エンパワーメントを考える3つのキーワードにおいて、(1)「繰り返す」を生きる、(2)「いっしょに」生きる、(3)「もしも」を生きる、という肯定的なメッセージを發している点である。セラピーやメソッドではない「生き方」として、演劇ワークショップを提示しているところに楽しさを感じた。ワークショップのファシリテーター：とみやまあゆみさんが、「エンパワーメント」について書いているコラム2も示唆的である。

小倉康嗣「第9章 高校生が描く原爆の絵とエンパワーの連鎖—トラウマ的な感情の継承をめぐる—」は、本書中、50頁を超える最長の章であり、富田葵天さん（原爆の絵の作者で現代アーティスト）のコラム3の文章と一緒に読むと、さらに迫力が伝わってくる。小倉

さんは、高校生たちとの丁寧なインタビューを通して、被爆者たちの苦しみや恐怖、トラウマを伝染しながら、継承していく「エンパワーメント」を描いている⁶⁾。原爆の悲惨さを表す言葉に「言語に絶する壮絶さ」という表現が用いられる。しかし、絵を学ぶ高校生が被爆者から話を聞いて描いた絵こそは、言語を超えて伝わるものがある。これは、いったい何なのだろうか？ 芸術と言う経験を通して、継承されている力だと言える。絵を描く高校生だけではなく、焼死体をまたいだことがトラウマになっていた証言者：白石さんが山崎さんの絵を見てから、トラウマが消えていくという話や高校生：河元愛香さんのお母様：直美さんが著者である小倉さんと同じような経験（3～4歳の時に原爆資料館の展示で見た写真にショックを受けて、それ以後、資料館にも行けないし、夜電気を消して眠ることさえできなかった、という経験）を持っていて、それが娘の「原爆の絵」制作以来、消えていったという経験も＜エンパワーの連鎖＞と言えるだろう。

ドイツのフロリアン・ヘンケル・フォン・ドナースマルク監督の映画『ある画家の数奇な運命』（2018年）を昨年、日本で見たが、現代ドイツ美術界の巨匠、ゲルハルト・リヒターの数奇な運命が描かれている。クルトは戦時中、叔母エリザベトが、精神病院に送られ、医者によって抹殺された、という悲しい記憶が残っていた。貧しい画学生のクルトは、恋人エリーの父親が医者で、戦争中はナチス・ドイツの優生思想の下で、障害者、精神病患者を殺していたことを知る。東ドイツから西ドイツに亡命したクルトは、義父・ゼーバントの欺瞞を暴く絵を描くことから、「画家」の真実を見出ししていく、と言うストーリーである。「画家が作品の中に自分を見出す瞬間」（奈良美智⁷⁾とは、確かに感動的なものである。その感動と同じものが、小倉さんの論文の中にあった、と言えよう。

澤田唯人「第 10 章 「かつて、あの人は、ここにいた」—他者の生の痕跡に触れる—」は、感情の痕跡とアート、そして身体を介しての傷（創）に出会うこと、「私」が他者の生の「痕跡」になるということ、などを慶應義塾大学通信教育課程の夏期スクーリング「生と感情の社会学」で実践した内容が記述されている。大変興味深い教育実践の記録である。コラム 4 を書いた三岡瑞樹さんは、2019 年没と書かれていて、「かつて、あの人は、ここにいた」というタイトルが、死別を意味しているように思われたのだが、「そうだったのだ」と理解した。「手首に何筋も残る傷跡」は、正直な気持ちが良く表れている心に残る文章である。

岡原正幸「第 11 章 エンパワーの場所 なぞる/癒す パフォーマンス」では、「アートベスト・リサーチが、アートを研究活動の中に取り込むことで、科学言語だけでは難しい（いやむしろ排除してきたような）多層的でパフォーマンス的な相互行為を、受け手と送り手の間に実現することができるだろうと思う。」（297 頁）と述べている。ABR を積極的に支持する立場からは、この言説は納得できるものである。コラム 5 を書いた高山真さんは、ライフストーリー・インタビューからエンパワーメントにつなげている。高山さんの『被爆者になる』⁸⁾ は、ライフストーリー研究と言うアカデミズムの中からエンパワーメントに結びついている。

しかし、芸術に基づいた調査とは何なのか？ 芸術を使用した調査なのか？ 芸術作品を創り出す上での調査なのか？ 岡原さんもはっきりした定義をしていない。「芸術学」という近接領域との相違もなされてはいない。美術史や音楽史はそれなりに厚みのある領域で、基本的には歴史学である。芸術作品を創り出す過程は、色・形・線・面・立体など細分化し、自然科学の領域ともいえるし、建築学は、それ自体が大きな学問体系である。また、音楽学も記

譜や楽器、音色などは自然科学となるし、芸術全体の「美学」は心理学、哲学、倫理学の隣接領域である。「芸術と社会」となると、アートと地域づくり、アート・フェスティバル（イベント）など都市計画学、地域社会学、商学、経営学などベンチャー企業なども加わって、マネジメント花盛りである。

私は、岡原さんの本書から、岡原さんが一番近いのは、「芸術と教育」ということなのか、とと思っている。「演劇ワークショップ」にしても、通信教育課程の夏期スクーリングを利用しての「生と感情の社会学」にしても、大学教育がベースとなっている。『三田の家』や日吉・教養研究センターの活動⁹⁾なども含めると、大学教育とアート・ベースト・リサーチが今のところ、一番適合しているのではないだろうか？

しかし、アカデミズムの世界でも、J.L. オースティンの『言語と行為』¹⁰⁾ やヴィトゲンシュタイン、日常言語学派など、科学的言語の限界を指摘するトレンドは大きく存在している。社会学においても、アルフレッド・シュッツの現象学的社会学、ゴッフマンのドラマトゥルギー、ガーフィンケルのエスノメソドロジーなどがそれに属する。科学史・科学哲学で言えば、トマス・クーンの科学＜革命＞派、ファイラアーベントの知の＜アナーキスト派＞など多彩だし、「サイエンス・ウォーズ」¹¹⁾も結局は、科学的認識と日常的認識の位相の問題に行き着く。現代社会学のP.ブルデューも文化人類学のブルーノ・ラトゥールも、現代フェミニズムのジュディス・バトラーも「パフォーマティヴ」なところを対象としている。岡原さん自身が、山岸健先生、浜日出夫先生などともに、現象学的社会学研究会のメンバーであったのだから、これらについては、「釈迦に説法」であろう。岡原さんは、アカデミズムの中の専門家・専門言語・科学言語批判に向かわずに、何故、アート・ベーストな研究の方に向かったのだろうか？ここが一番解けない謎である。「死別のパフォーマンスとしての社会学」という節で、私の『死別の社会学』（澤井敦さんと共編）の中の「配偶者との死別と再婚」¹²⁾という本の中の注6のことまで書かれているが、私は、「死別のパフォーマンス」を書いたつもりはないし、死別は、ごく日常的な出来事の中でも起こる。「自死遺族」というような非日常的な出来事は、個人的であるだけではなく、社会的なことであり、澤井さんと同じように「社会学」を志したからである。さらに言えば、「自死」が言いにくいだけではなく、「再婚」も言いにくい、ということも表している。三田社会学、三田文学に関係する人でも、江藤淳さん、山岸健さん、若松英輔さん、清水透さんなど多くの人が死別を経験することで、学問や批評に少なからぬ影響があった。これは、アートと関係なく生と死の関係性の問題である。

岡原さんは、おそらくアートが大変好きなのであろう。もしかしたら、社会学よりも好きなのかもしれない。私も芸術全般が好きである。このコロナ禍になる以前には、年間50展近い「展覧会」に出かけていた。東京国立博物館、西洋美術館、東京都美術館、芸大美術館、国立新美術館、国立近代美術館、横浜美術館、三菱一号館美術館、東京都庭園美術館、東京ステーションギャラリー、アーティゾン美術館、ザ・ミュージアム、東京都写真美術館・・・などなど。音楽もクラシックが多いが、サントリーホール、東京文化会館、東京オペラシティ・ホール、オーチャードホール、ミュージアム川崎、横浜みなとみらいホール・・・など、ずいぶんと出かけている。アートは好きだが、仕事にはしたくない、という気持ちがある。Discipline 主義者（学問領域固執主義）なのかもしれない。アカデミズムの立場から、本書を論じれば、「玉石混交」とか、「論理が一貫していない」とかいろいろと言えるだろう。しかし、ある意味では本書はその範疇を超えている。discipline の側から

のみ論じるのは的を射ていないと思う。そういえば、川合隆男先生、藤田弘夫先生たちで編集した『都市論と生活論の祖型—奥井復太郎研究—』において、私は、奥井先生の方法を「ポスト・デシプリナリーな研究方法」¹³⁾と呼んだことがあった。そう考えると三田の学者は、永井荷風、折口信夫、西脇順三郎、井筒俊彦を筆頭に、型破りな学者が多い。社会学は、輸入学問、官学を中心に、型に嵌められていく傾向は強いが、それでも、奥井復太郎、佐原六郎、きだみのる、松本信広、有賀喜左衛門、中井信彦などジャンルを超える学者も多いし、最近の鈴木孝夫先生、山岸健先生、藤田弘夫先生もその系譜に連なると言えるだろう。そういう意味では、型にはまった「優等生」の私などよりは、よっぽど岡原正幸さんの方が三田社会学の伝統を受け継いでいると言えるのである。

【註】

- 1) 安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也『生の技法—一家と施設を出て暮らす障害者の社会学』藤原書店、1990年(生活書院、2012年)1989年、塾文学部助手に採用された岡原さんの専門は「障害者の社会学」だと思ってきたし、この分野は社会学にとってきわめて重要だと思っていた。
- 2) 岡原正幸『ホモ・アフェクトス』世界思想社、1998年。この本は、「感情社会的に自己表現する」という副題にあるように、断章的で、主観や感情が表出しているため、「いささかの反感」も買いやすいと思われた。
- 3) 岡原正幸・安川一・山田昌弘・石川准編著『感情の社会学』世界思想社、1997年。
- 4) 松尾浩一郎・根本雅也・小倉康嗣編『原爆をまなざす人びと—広島平和記念公演八月六日のビジュアル・エスノグラフィー—』新曜社、2018年
- 5) 「ファド」にはポルトガル語で「サウダージsaudade」と呼ばれる、郷愁、憧憬、思慕、切なさ、などに意味合いを持つ感情が込められるが、これは、パンソリにも演歌にもゴスペルにもジャズにも言えることではないだろうか。
- 6) 小倉さんの戦争体験の継承に関する本格的な論文は、蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴編『なぜ戦争体験を継承するのか—ポスト体験世代の歴史実践—』みずき書林、2021年。所収の「第1章 継承とはなにか」において論じられている。
- 7) 映画『ある画家の数奇な運命』パンフレット所収の奈良美智へのインタビュー「画家が作品の中に自分を見出す瞬間」参照。奈良さんは、リヒターと同じデュッセルドルフ芸術アカデミーの出身である。
- 8) 高山真『<被爆者>になる—変容する<わたし>のライフストーリー・インタビュー—』せりか書房、2016年。本書は、慶應義塾大学文学部の第1回井筒俊彦賞を受賞している。
- 9) 「三田の家」については、岡原さんたちが中心となって90年代頃から続けられた。日吉・教養研究センターでは、法学部の横山千晶先生などを中心に、2000年代頃から「身体知」のセミナーや「横浜寿町の家」を続けてこられた。横山千晶『コミュニティと芸術—パンデミック時代に考える想像力—』(慶應義塾大学教養研究センター叢書 21) 慶應義塾大学出版会、2021年、参照。
- 10) J.L.Austin, *How to Do Things with Words*, Oxford University Press, 1960, J.L. オースティン(坂本百大訳)『言語と行為』大修館書店、1978年
- 11) 金森修『サイエンス・ウォーズ』東京大学出版会、2000年。三田の有末ゼミ出身で早稲田大学の那須壽先生の下で博士論文を仕上げた河野憲一『自明性と社会—社会的なるものはいかにして可能か—』晃洋書房、2016年、は、現象学的社会学研究会に所属していたかどうかはわからないが、三田出身の本格的シュツツ研究者として特筆に値すると考えられる。
- 12) 有末賢「配偶者との死別と再婚」澤井敦・有末賢編著『死別の社会学』青弓社、2015年、所収。(118—142頁)
- 13) 有末賢「生活誌研究と奥井復太郎」川合隆男・藤田弘夫編『都市論と生活論の祖型—奥井

復太郎研究一』慶應義塾大学出版会、1999年、150頁参照。

(ありすえ けん 亜細亜大学都市創造学部)